

# 日本英学史学会 中国・四国支部

## ニューズレター

No.61

*Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter*

### 祭が終わって

年頭のご挨拶

竹中龍範

皆さま、明けましておめでとうございます。

昨年度は、文化5(1808)年に起きたフェートン号事件から200年ということで英学史研究者はその節目を祝しました。また、今年度は、この事件を機に長崎の蘭通詞がその翌年より英語学習を開始した時より200年目に当たることから英語教育界でも意識が高まって、8月に鳥取大学にて開催された全国英語教育学会研究大会では特別講演が企画され、私が依頼を受けて「瞥見 日本の英語教育200年」との題下に幕末・明治期の英語教育の流れを話し、さらに英学史料展を行いました。講演終了後、面白かったとのご感想をいただいた方、また、史料展で実物を手にとって興味を示された方が少なくありませんでした。

ただ、これをきっかけに、英学史・英語教育史に関心をもち、自分もこれからこの分野について研究してみようと思われた方がどれくらいいたかということになると、一抹の不安に襲われます。日本英学史学会でも会員の勧誘に頭を痛めているようですし、これはわが支部にあっても同様です。昨年度、今年度とせっかく輝いた英学史・英語教育史ルネサンスの灯をいかに燈し続けるのか、これを真剣に考えないと、祭の灯が落とされると元の静けさに返るのと同じように、学会組織が脆弱化し、衰弱に向かうことは避けられません。

さいわい、現在では国立国会図書館所蔵の明治期・大正期文献のうち、著作権が切れたものについてはデジタル・ライブラリーとして容易に、在宅のまま閲覧できるようになり、昔のように資料収集に時間的・経済的負担がかかるということが軽減されるようになっております。また、研究紀要等もレポジトリ化が進められ、かつてはバックナンバーの所蔵状況から調べねばならなかったものが、パソコンの画面からたやすく入手できるようになりつつあります。学会活動を広報する点でも学会ホームページが活用できるようになっています。しかしながら、このようなハード面がいかに整えられようとも、それを通じて寄せられる要求に応えられねば組織の存立理由が薄れます。新会員の勧誘とあわせて、皆さまのさらなるご研究、ご発表をお願いする所以です。せっかく点った祭の灯をいっそう明るく輝かせようではありませんか。

(香川大学 / 日本英学史学会中国・四国支部支部長)

## 平成21年度 第2回(通算61回)研究例会 報告



2009年12月12日(土)、高梁市文化交流館(岡山県高梁市)において、平成21年度第2回(通算第61回)研究例会が開催されました(参加者19名)。「キリスト教と日本の英学」の歴史を伝える高梁市を訪ねた今回の例会では、郷土史家の高見彰先生によるご講演、ならびに会員による研究発表5本が行われました。

開催に際し、理事の能登原昭夫先生、会員の齊藤泰成先生をはじめ、岡山の会員の方々には大変お世話になりました。講師をおつとめくださいました高見先生には、素晴らしいご講演に加え、貴重な書簡や書物を会場に展示してくださり、また、高梁市に関する数々の資料をご提供いただきました。心よりお礼申し上げます。

### 高梁研究例会プログラム

日時： 2009年12月12日(土) 13:00~17:00(受付 12:30~)

会場： 高梁市文化交流館 3階 第1講座室(〒716-0043 岡山県高梁市原田北町1203-1)

開会行事(13:00~13:10) 支部長挨拶

講演(13:10~14:10)

備中高梁における英学事情 (備中松山藩を動かした一通の手紙)

講師 郷土史家 高見 彰 先生

司会および講師紹介 能登原 昭夫(元 山陽学園大学)

研究発表( 14:15~14:45、 14:45~15:15、 15:15~15:45 )

「条約改正」と communicate (通知する)

中村 浩路(元 岡山商科大学)

岡山県商業学校の設立と初代校長小田堅立

齊藤 泰成(岡山東商業高等学校)

ロマン・ロランの「序文」—仏語版『出家とその弟子』への—

野村 勝美(本学会会員)

司会 松岡 博信(安田女子大学)

研究発表( 15:50~16:20、 16:20~16:50 )

広島高等師範学校入学試験英語問題にチャレンジ!

田中 正道(広島大学名誉教授)

H. D. Leland に関する研究: 岩国中学校での教育実践を中心に

保坂 芳男(立命館大学)

司会 隈 慶秀(福岡県立明善高等学校)

閉会行事(16:50~17:00) 副支部長挨拶

懇親忘年会(17:30~)(「う乃」にて)

【講演】

## 備中高梁における英学事情

高見 彰 先生



今回の研究例会では、郷土史家の高見彰先生をお招きし、ご講演をお願いしました。先生は「備中高梁における英学事情」と題するご講演の中で、備中松山藩における漢学、洋学、そして英学がどのように息づいてきたか、さらにそこから現代へどう連なっていくのかをお話してくださいました。随所に興味深いエピソードを盛り込んでくださり、とても温かな眼差しで聴衆に語りかけてくださいました。また、ご講演に合わせ、明治13年に高梁を訪ねた新島襄の手紙や、藩の学風を伝える幕末期の洋学書の展示をしてくださり、参加者一同、たいへん興味深く拝見しました。

【講演の概要】三島中洲（山田方谷の弟子）が備中松山藩山田方谷宛に書いた手紙には、外洋を走る帆船の購入を勧めること、オランダ語から英学へ切り替えるため松山藩から江戸へ出ている医学生を堀達之助のもとへ入門させたことなどが書かれている。この帆船購入に踏み切ったことで、新島襄が函館から密出国出来たこと（この船で江戸から函館に向っている）明治13年新島が備中高梁を訪問した事がその後の高梁の発展に大きな影響を与えていること、英学の発展にも寄与していることなどにふれてみたい。

### 【参加者の感想】

高梁と言うと英語との関わりからは平川唯一くらいしか結びついていなかったところ、幕末明初における高梁の英学について漢学からの流れを跡づけて頂き、まさに知新でした。山田方谷、三島中洲の名が英学史のお話に登場するとは驚きでした。<Dragon>

備中松山藩において、学問が藩を救い、傑物を創り出したとのお話を聞き、E.ベーコンの「知は力なり」の言葉を思い出しました。また、伊吹知勢が高梁出身と知り、大変参考になりました。<Emma>

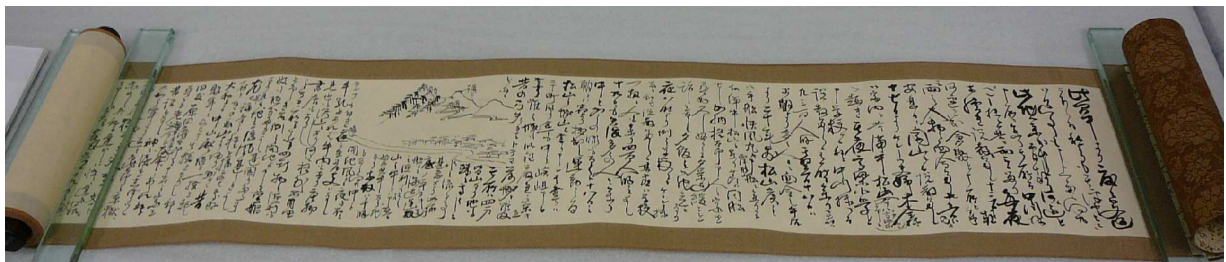
板倉伊賀守勝静が学問を生かした藩の運営、山田方谷を筆頭に藩校として「有終館」にて、人材を育てた史実を拝聴出来たことは感激でございました。<宗八>

すばらしいご講演をありがとうございました。備中高梁と福山藩、蘭学、英学、佛学の視点から、新たな関心を見出した気持ちです。<M.M.>

地元の研究者ならではの内容の濃い話が聞けて良かったです。翌日のフィールドワークにもおつき合い頂き大変充実していました。山田方谷の話はもちろんですが、高梁と、新島襄や石川達三との関係も意外で面白かったです。どうもありがとうございました。<保坂芳男>

新島襄が函館でアメリカへの密航を企てた頃、通詞として堀達之助がおりましたが、彼と新島襄とのコミュニケーションはなかったのでしょうか。<五十嵐二郎>

とても分かりやすい講演をして頂き備中高梁の英学事情をよく理解することができました。高梁市は逸材を輩出した地域なのですね。<もみじまんじゅう>



基礎としての漢学、その発展としての洋学のすばらしい一例がここにも見られます。磯田光一氏「現在の大学では学部4年間は漢(中国)文学、マスター2年で英文学、ドクター3年間は日本文学をやって、旧制大学の英文専攻の卒業生と同じ位の力となるであろう」<中村浩路>

大変興味深く拝聴いたしました。<齊藤泰成>

備中高梁に関するさまざまなことを教えていただきとても勉強になりました。実際にこの土地を訪れ自分の足で踏み、町並みを見たあとだけに先生のお話に想像を駆け巡らせながら伺いました。<Rainbow>



## 【研究発表】

### 「条約改正」と communicate (通知する)

中村 浩 路

明治12年か9月から20年9月まで井上馨は条約改正の仕事に携わり、ようやく会議がまとまりそうになって、communicate 1語の解釈をめぐる井上自身の外務大臣辞職、第1次伊藤内閣の瓦解、ついに条約改正会議の中止に追い込まれた。communicate は通知するという意味ではないのか？ LDCE の signpost でみると、1. EXCHANGE INFORMATION, 2. TELL PEOPLE SOMETHING 3. UNDERSTAND, 4. DISEASE, 5. ROOMS とある。諸外国の連中は1ではなく3の意味で追及してきたのである。翻って現在の日本で大流行のコミュニケーションの意味を考えたとき、我々は1と2だけでなく3の意味も忘れずに実践しているのだろうか。



### 【参加者の感想】

コミュニケーションは伝えるだけではなく伝わらなければ意味がないと思いますし、互いに目的が達せられることが大事です。そして互いのコミュニケーションを通して、新しい自分を発見することも大事だと思います。<五十嵐二郎>

条約改正に絡む誤解・誤訳について communicate を例にお示し頂きましたが、この語が正確に日本人

に理解されるようになったのはどのような道筋を経てのことなのでしょうか。<Dragon>

日本人がいつまでたっても英語がうまくならないのは日常生活で英語を必要としないという理由以上に、国民性にあることを改めて実感しました。

<Emma>

語感の難しさを実感しました。<齊藤泰成>

中村先生の話に陶醉、communicate できました。雄弁であることも特技かな！大変楽しく拝聴出来ました。貴重なお話ありがとうございました。<宗八>  
条約文中の一語がこれほどのインパクトを持つものであることを知り、緊張しました。

<もみじまんじゅう>

communicate や communication は、今や学校英語教育のキーワードをなっています。中村先生の話は、われわれがその言葉の表面的な理解しかしていない状態で英語教育を行っていることへの警鐘のように思われました。大変奥の深い話でした。

<保坂芳男>

Understand があって初めて communicate が成立する。このお言葉にしびれました。一方的に speak, talk すれば communicate したような気になっていましたが、相手に understand させることができる communicate とは何か。改めて、言葉の持つ意味を考えさせていただきました。

<Rainbow>

### 岡山県商業学校の設立と初代校長小田堅立 岡山県における明治30年代からの商業学校教育 の内容と英語教師としての小田堅立の功績

齊藤 泰成

岡山県商業学校(現岡山県立岡山東商業高校)は明治31年(1898)に創立された。小田堅立は初代

校長として明治31年6月より大正3年(1914)4月まで約16年間草創期の岡山県商の教育全般にわたって尽力された。特に英語教育には力を注がれ、1年生に週8時間もの授業がなされ、本人も英語教師として *Kobe Chronicle* を教材に授業をされた。そして卒業式では20分以上の英語による答辞が朗読されたという記録も残っている。以下に岡山県商の生徒が英語の力をつけていたかうかがい知ることができる。今後はさらに調査・研究をして小田堅立初代校長と草創期の県商、さらには他の商業学校との比較検討も加えてみたい。



【参加者の感想】

「岡山商法講習会」の設立が明治13年、本陣跡福岡屋(現・天満屋の一部)を借りて授業を開始するが(津山)県北日本原の開墾に着手した開拓は、当時の失業士族の救済も兼ねて、開拓者教育のため創設した(明治12年)有功学舎も職業教育の原点であろう。デビュー戦御苦労様でした。<宗八>

学会で隈先生が指摘されたように岡山商業学校の初代校長の小田は、修猷館の名物英語教師であったようです。彼を初代校長に任命した点、戦後まで一貫して続く外国人嘱託講師の採用は、いかに当時の岡山商業学校が充実した外国語教育を行ったかを示していると思われました。なぜ岡山の地に全国で四番目の商法講習所が作られたのか気になるところです。次回の発表も楽しみにしています。

<保坂芳男>

岡山県高梁における明治時代からの商業高校における英語教育。進学校ではないにも関わらず熱心に英語が教えられていた。また、熱心な先生ほど、皆に嫌われていた等、なかなか人の評価というもの難しいものだと感じました。「好かれる」(だけの)教師を目指すか、「生徒に力をつけることのできる」(厳しくとも)教師を目指すか。言うは易し行うは難し。がんばります! <Rainbow>

時間の制約もありましたが、小田堅立が英語を重視したということでしたので、その辺りのことをも

う少し詳しくおまとめ頂ければと思いました。

<Dragon>

小田堅立の足跡について興味深く聞かせて頂きました。間野貫之についての調査も期待しております。

<Emma>

『岡山県教育史』など各県教育史を参照することによってより詳細な時代の英語教育の実際が見い出されるように考えます。<五十嵐二郎>

県立商業学校・大正初年度在学の私の父(明37年生れ)が使用した英語辞書参考書。斎藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』、南日恒太郎『英文解釈法』。

<中村浩路>

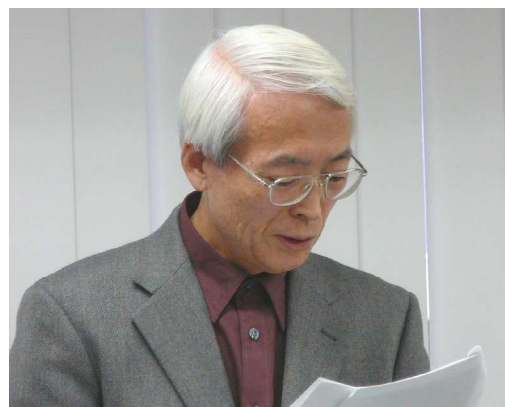
県商の沿革、小田堅立の功績を知り感動しました。

<もみじまんじゅう>

### ロマン・ロランの「序文」 仏語版『出家とその弟子』への

野村勝美

ロマン・ロランが倉田百三の『出家とその弟子』(英語版、1922年、グレン・W・ショー翻訳)を読み、1924年に同戯曲を絶賛する手紙を届けたと聞く。その手紙(仏語原文)を読んだことはないが、2009年に入手した同書仏語版「序文」(1932)の中でロランが戯曲を称えることばにじかに接することができた。その「序文」(原文)を筆者訳しながら、概略を今回紹介した。ロランが戯曲をどのように美しく読み取り、そしてロラン自身が西洋と東洋の相補性をいかに深く証しているかが明らかになるように努めた。そして最後に、時の英語教育が果たしたひとつのかけがえのない役割を確認するべくふれた。



【参加者の感想】

よく古書が向こうから現れるといいますが、倉田百三を追い続けられているからこそその巡り合わせと思います。ただ、研究発表としてはこのロランの序文の訳の先に何を分析するかが明確に読み取れることが求められます。<Dragon>

ロマン・ロランの仏文「序文」入手、そして、その全文の完璧な理解のためにギリシャ語まで学ばれたその情熱に感銘を受けました。<Emma>

仏語では読めませんが英語訳で語法、語感、文法などにも意を注いで読んでみたいと思います。

<五十嵐二郎>

なつかしやロマン・ロラン、『出家とその弟子』!

<中村浩路>

ありがとうございました。<齊藤泰成>

序文の日本語訳は大変だったことと思います。本当にご苦労さまでした。<もみじまんじゅう>

フランス語だけでなく、ギリシャ語をすらすら読まれる野村先生に感銘を受けました。<保坂芳男>

文学作品やフランス語は正直、よくわかりませんが、野村先生の誠実なお人柄が発表から伝わってくるようでした。<Rainbow>

### 広島高等師範学校入学試験英語問題に チャレンジ!

田 中 正 道

本発表においては、戦時色が強まった昭和初期の広島高等師範学校入学試験英語問題 10 年分(昭和7年~昭和16年)に焦点を当て、出題形式、出題内容の特徴を浮き彫りにした。旧制高校の多くが英文和訳と和文英訳のみの出題だったのに対し、広島高等師範学校はこれらに加えて発音、文法等の多彩な設問形式を取り入れて革新的であったこと、出題内容に関しては時局の影響が伺える問題があり、「教育の中立性」を保つことが困難であったことを指摘した。今後、異なる校種の学校の入学試験問題を取り上げ、それらの特徴を明らかにすることを継続課題とした。今回もフロアから貴重なご指摘を頂戴しありがとうございました。



#### 【参加者の感想】

莫大な資料から広島大学の入試問題の傾向を整理分析されてのご発表に、少しでも次世代へ残してお

きたいというお気持ちがいよいよ伝わってくるようでした。師範学校の入試にふさわしく題材も教育論系が多く感じましたが、現代の入試に比べ若干、易しいような気がしました。<Rainbow>

入試問題の題材を六高のそれと比較することによって、いかに後者がレベルかが逆に浮き彫りにされたように思いました。問題のバランスは前者の方が取れているように思いました。<保坂芳男>

「英文和訳」と「和文英訳」は今でも日本の英語教育の基本であることが本日の発表でも理解できたと思います。それは、英語が外国語であるという日本の現実があるからだと思います。<五十嵐二郎>

師範学校入学試験問題、大変興味があります。英文和訳・和文英訳、今日大いに参考になります。貴重な資料活用させていただきます。<宗八>

発表時間が充分であれば入試問題の分析を伺えたかと残念に思いました。その際に六高との比較と合わせ、東京高師の問題との比較もなされるべきかと思いました。時局を反映しているのは皇国民の育成を担うとされた師範学校の性格があつてのことではないでしょうか。<Dragon>

英語時間数の多さに驚きました。<齊藤泰成>

広島高師だけでなく、旧制高校が語学学校に近い存在であったことがよく分かりました。<中村浩路>

今回も豊富な資料を駆使しての楽しく説得力に富む発表をありがとうございます。次回の発表も楽しみにしております。<Emma>

### H. D. Leland に関する研究： 岩国中学校での教育実践を中心に

保 坂 芳 男

まず明治後期から大正の前期にわたり山口県が独自で外国人講師を採用してきた経緯を述べました。Leland は、岩国中学の初代校長の橋本が滋賀尋常中学で英語を習った縁でアメリカから呼び寄せたようです。後半は主に卒業生の回想録を紹介しました。授業では発音を厳しく指導したようですが、卒業後多くの生徒から感謝され慕われていた様子も読み取れました。今後は、Leland の授業での様子を他の多くの卒業生の回想録などから明らかにしたいと考えています。また、初任地の滋賀尋常中学を始め、大阪尋常中学、海軍兵学校、第八高等学校での授業の様子も徐々に明らかにしていきたいと考えています。まだまだ不十分ではありますが、多くの先生方から貴重な意見や資料の紹介を頂き感謝しております。今回の発表を機に、次回への展望が見えてきました。ありがとうございました。



### 【参加者の感想】

岩国におけるお雇い外国人講師 Leland 氏は「好かれ」かつ「生徒に力をつけることのできる」教師であったと思います。現代もなお、英語教育に熱心な山口県の土壌が生んだ教師の一人であったと思います。今後のご研究で多くのことが判明することを楽しみにしています。<Rainbow>

今回も非常に丹念な調査で Leland の足跡を明らかにしていくその情熱に感銘を受けました。今後のさらなる調査に期待しております。<Emma>

気合いの入ったご研究でした。豊富な資料、じっくり読ませていただきます。

<もみじまんじゅう>

広範な資料調査に基づく御発表でしたが、残された課題も明白で、更なる調査、ご発表を期待しています。<Dragon>

資料集めが大変だと思います。<齊藤泰成>

今後の研究を期待致します。楽しみにしています。

<宗八>

Learn by heart!の重要性とその実行の困難、昔も今も同じ。<中村浩路>

田舎の旧制中学校出身の私にとってはとても羨ましいお話でした。<五十嵐二郎>

### 【例会全体に関する参加者のコメント】

和の洋とのかかわりを、それぞれの立場、アングルから、証しながらの講演や発表を拝聴し、歴史のなかの日本(文化)にさんさんとふりそそいだ「洋の光」の糸を和が奏でる音楽(しらべ)につつまれて、ときの経つのを忘れました。ありがとうございました。<Qats>

岡山、山口、広島それぞれの研究発表を聴かせて頂き、研究領域のひろがり充実をしみじみ感じます。能登原先生を始めとした準備委員会のご苦勞にあらためて厚く御礼を申し上げます。<M.M.>

広く好奇心をかきたてられました。<中村浩路>  
時間通りの進行で充実した学会でした。多謝!

<五十嵐二郎>

実に収穫の多い例会でした。<Dragon>

### 【史蹟見学】

研究例会翌日の12月13日(日)、高見彰先生にご案内いただき、頼久寺や高梁キリスト教会など、高梁の史蹟を散策しました。



## 英学史情報ひろば

『ラフカディオ・ハーンの会』ニュース 第111回 (2009.11.14.)・第112回 (2009.12.5.)・第113回 (2010.1.9.): 毎月、比治山大学で開催される会の詳細な資料。第113回のニュースでは、中国・四国支部の顧問でもいらっしゃる小泉凡先生が、松江市から特別功勞者として表彰されたことが紹介されています。

[ <http://home.att.ne.jp/sea/reiko/hearn.htm> ]

日本英語教育史学会第228回月例研究会: 2010年3月21日(日)午後2時~5時、県立広島大学広島キャンパス(広島市南区宇品東1丁目)にて開催。研究発表は、「東亜同文書院入学試験英語問題瞥見」田中正道(広島大学名誉教授)「受験英語と参考書の歴史(1): 明治期を中心に」松田佳奈(和歌山大学大学院生)・江利川春雄(和歌山大学) [ <http://hiset.jp> ]

## 中国・四国支部ニュース

### 平成 21 年度第 2 回役員会

2009年12月12日(土) 高梁例会に先立ち、役員会を開催し、今年度の活動報告および平成 22 年度活動計画を協議しました(出席者 6 名)。

来年度の支部総会および第 1 回研究例会は、2010年5月29日(土) 比治山大学(広島市)での開催を予定しています。第 2 回は 12 月 11 日(土) 香川大学(高松市)での開催を計画中です。

そのほか、研究例会のプログラム編成のあり方について協議しました。また、機関リポジトリ等、電子版の研究成果公表機会の増えてくることを睨み、紀要に掲載された論考の著作権の所在や、その転載に際しての手続き等について、投稿規程に必要な文言を加えるなどの検討が必要であることを確認し、継続審議としました。

### 『英學史論叢』第 13 号原稿募集

中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第 13 号(2010年5月発行予定)の原稿を募集します。

研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、ニューズレターNo.60、および『英學史論叢』12号に掲載の「執筆要領」「標準書式」に従ってください。

・原稿提出の締切は、**2010年2月20日**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートへの投稿は、正副計3部をお送りください。英学史随想、書評等の原稿は1部お送りください。

### 新入会員(敬称略)

安部規子(あべ のりこ) 福岡県

所 属: 有明工業高等専門学校

研究分野: 英語教育史

## 英学史学会全国ニュース

### 日本英学史学会『英学史研究』42号

2009年10月1日付けで発行されました。竹中龍範氏による論考「開成所『英吉利単語編』と『対訳名物図編』・『英国単語図解』」(pp.173-183)が掲載されています。

### 「日本英学史学会報」No.120

「日本英学史学会報」No.120 が発行されました(1月1日)。内容は次の通りです。

- ・新年のご挨拶(庭野吉弘)
- ・「長崎通詞研究会」の発足を祝す(堀 孝彦)
- ・英語とフランス語: よい<ことば>とは(滑川昭彦)
- ・第 46 回全国大会および総会の報告
- ・『英学史研究』第 43 号原稿募集(5月31日締切)
- ・平成 22 年度全国大会(10月23~25日)の予告

ほか

日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です(入会金 2,000 円、年会費 5,000 円)、問い合わせは事務局まで。

**広島英学史の周辺(27)** 広島市から県北へ向う中国自動車道を走行中、霧が中腹にかかった前方の山々が、かすかに島のように見えることがあります。短時間で景色が変わるため、これが雲海かな、と思う程度だったのですが、このたび、実に見事な雲海を、高梁で目にすることができました。例会当日の朝、賀陽インターから高梁へ向う下り坂で、一面の雲海が突然目の前に。展望台に車を止め、思わずシャッターを切りました。高梁は日本有数の名所とのこと。幻想的な雰囲気、支部の歴史に残る研究例会を一層印象深いものにしてくれました。新しい年を迎えました。今年も皆様とともに、私たちの歴史に新たな1ページを刻むべく、様々なことにトライし続けたいと思います。どうぞよろしくお願いします。(寅)



日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.61

2010年1月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562

県立広島大学 馬本研究室内

電話 & FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.61 January 31, 2010